

者の管見では「脳」に対する認識がない時代であるから、痴呆の中核症状である「記憶、認知、人格」障害の判別ができず、現代の我々が理解する精神病との鑑別は不能といわざるをえないが、著者はその至難な作業に敢えて挑戦し、後学者に貴重な指針の数々を提供している。高く評価したい。蘭医学が導入され、宇田川玄真の「西説内科撰要」、緒方洪庵「扶氏経験遺訓」などを検索し、痴呆と脳の関わりを認識する萌芽と位置づけており、洪庵の「老衰」と「健忘」の記述に着目している。識者らが、著者とともに蘭学時代に焦点を絞り、今一度老人痴呆に課題をもってはいかがであろう。共同研究が可能であれば、その成果があがるのではなからうか。

近代明治期となりドイツ医学が導入されて、痴呆は精神医学の分野で認識された。著者は日本における初出の精神病学「精神病約説」(神戸文哉)はじめ江口襄「精神病学」、呉秀三「精神病学集要」など、また、わが国最初の専門書である入澤達吉「老人病学」まで明治期発刊の斯界の書を検索して痴呆の記述を点検し、当時の痴呆に関する概念の把握に著者は努めており、その労は多ししなければならない。これが容易に可能になったのは、著者が以前医育機関の老舗である京都府立医科大学に勤務していたからである。

ところで、評者はかねて日本における老人医学の源流を検索してきた中で、一つの解明したい点があった。それは「痴呆」の医学用語を誰が最初に使用したか、また、「痴」か「癡」かについてである。評者のメモによれば、神戸は「痴呆」、呉

「癡呆」、石田昇「痴呆」、入澤は「癡呆」、内科用語集・日本内科学会(昭和十六年)では「痴呆」、医学用語集第一次選定では「痴呆」、戦後の植松七九郎の「精神医学」(昭和二三)では「老年癡呆」と漢字表記に相違がある。このようなことの記述の理由は、本書には多く「癡」が登場するからである。本書の大きな特徴の一つは現代日本の異常な高齢化社会における老人本人は勿論、痴呆状態に入った老人を取り巻く社会環境のありかたを著者は歴史的記述をとおして論述しており、類書ではまったく見られない。従って、この分野の指針となることは確実であろう。なにはともあれ、一読されることを推奨します。

(寺畑 喜朔)

〔法政大学出版局、東京都千代田区九段北三一―二七、電話〇三―五二―四一五五〇、二〇〇二年七月二十五日、B六判、二百七十頁、二二〇〇円〕

会田 秀介 著

『医と石仏・庶民の治病信仰』

著書の帯に「病平癒の切実な願いと祈りが石仏にはこめられている」と述べ通読すると著者は石仏と出会い、写真を撮る様になり、やがて石仏を通して民間医療の一端を探り著書と成ったのであろう。医史学というよりも民俗学に視点を置

いている。

地域の医史学、民俗学の両面から石仏調査をされた森 納、川島恂二両先生の著者のほか郷土史にも個々の石仏の成立しが明確に報告されている文献も散見される。

研究対象物が物言わぬ石の仏からか、医史学的な調査は非常に難しく、ともすれば聞き書きにのみ終わってしまうことも多く私と同様調査したのが今となつてはなつかしい。特に京都では市内に八〇〇〇体の石仏があり、これを一体ずつ調査し、その史的根拠を説明するには相当の困難が伴い、今もなお明治初期の廃仏毀釈により足利尊氏が地藏信仰により十万體を作らせたと言われる石仏が地下工事により続々と発掘されており、各町内にある地藏等の叢祠はすでに過密状態となっている。結果もはや一人で調査する限界をこえている。会田氏は特に西日本以北を重点に東北、関東、中部、北陸、近畿さらに福岡県まで足をのびし調査されており、その苦労に敬服している。石仏の多くは地藏信仰から生れたものと理解し得るが、個々の製作年代をはじめ石仏の生産地、形態、安置されていた元の場所等全て明らかにするのは不可能に近く、著者も同じ思いをされたであろう。石仏をはじめモノクロで撮されていたが鮮やかな赤の石仏に関心を抱かれ、著書のはじめに美しいカラーの石仏を添え、視覚的に芸術性を高めた、なかなか見ごたえのある写真技術を披露し、モノクロの写真に毎ページ説文を横に添え見させて読ませる手法は通読し易く、石仏が一層極立って見える。京都では赤い涎掛け

をかけているが、石仏は多くは純白に彩色されており、毎年地藏盆に新しく化粧されるが、赤い地藏は見た事がない。赤色に対する医療信仰は痘瘡神に対する赤絵、正月の男性用の赤膳と同様、疫神が地藏信仰に伝播したものと思われるが珍しい。室町時代の公家日記を読むと公家達の家族が病になると地藏へ病氣平癒祈願に出かけて行く条項から、地藏信仰は現世利益的なものと野仏の様に亡くなった者への供養塔とする宗教的な地藏信仰が入り混じり実に多くの石仏が全国各地に作られたであろう。著者は石仏の面白さから石仏巡りがはじまり、民間医療信仰の形態に関心を持たれたとされるが、写真を見ると石仏のまわりの背景の多彩さに驚かされる。石仏にそなえられた献花、野草と樹木、コンクリートブロックの片端に追いやられた石仏を見ると、四季を通して多くの時間を費やし撮影された証しが見えて来る。医史学的考察は別にして民俗学的伝承はよく調査されており、何よりもビジュアル的に読むには格好の書であるが、欲を言えば具体的な場所の明示がほしい所である。

私は眼科医の立場から特に眼病の民間医療から見た地藏を調査しているが、特に埼玉県蔵市の目疾地藏に関心をいだいた。説明に右眼に味噌を塗り込める眼病平癒を始めて知り民俗学的に非常に興味を持った。京都の四条繁華街の祇園にある雨止み地藏から目疾地藏に転化した地藏は玉眼入丈六坐像の木彫地藏であるがやはり右眼がかすかに曇っている。著者の調査された石仏も右眼であり、その他の私の見て来た石仏

も右眼である。この同一性はなぜなのであろう。著書の石仏を一ページづつながめて行くと興味はつきない。最後にお断りしておくが著者は私の著書を参考文献として、載せていただいているが私の名が誤っていることを著者に成り代わり訂正させていたいただきたい。

(奥沢 康正)

〔青娥書房、東京都千代田区九段南三―三―二、電話〇三―三二六四―二〇二三、二〇〇二年八月、A五判、二四六頁、二〇〇〇円〕

深瀬 泰旦 著

「天然痘根絶史―近代医学勃興期の人びと―」

深瀬泰旦氏の「天然痘根絶史―近代医学勃興期の人びと―」は、氏がこれまでに諸誌に発表した二十数篇の論考に、書き下ろしの文を加えて一本に纏めたものである。最も古い論文は一九七六年に、最も新しい論考は二〇〇一年に発表されているから、二十数年間にわたる学業ということになる。

この長い期間、日本における近代医学に大きな影響を及ぼし、後に東京大学医学部となった江戸のお玉ヶ池種痘所を巡る諸問題とそれと密接に関係する牛痘接種関連の問題に焦点をしばって論文を発表し続けてこられた氏に対して、まずもって敬意を表したい。

長期間、同じテーマの研究を続けると、それが脳裏に刻み込まれることになり、活字化する際、つまり一本に纏める時、校正に支障を来すことになる。著者の脳の中を「原文」が占拠しているため、誤った文章を正しく読んでしまう。その結果誤りが看過されやすい。これは評者も幾度も経験していることである。書評は誤植などの不備を指摘することではないので詳しくは言及しないが、残念ながら諸所目につく。一例を示しておく。三六八頁の文献二十一には三ヶ所、文献二十二には二ヶ所の誤植がある。

誤植は見る人が見れば直ちに分かるので大した問題ではない。その文章を必要とする人が、誤りを訂正した上で引用すればよい。しかし事実が誤って記述されていると困る。例えば「はじめに」の第一行にあるジェンナーの種痘法発見を「二七八九年」としているが、明らかに「二七九八年」の誤りであろう。一七頁で一七九八年としているからである。ジェンナーがセラ・ネルムズの手が発した牛痘の痘漿をジェームス・フィツプスに植えたのが一七九六年、これも含めた諸実験の結果をまとめて一書として発表したのが一七九八年である。二六七頁でジェンナーは「バークレイ」の「グロースターシャー」の生まれとしているが、「グロースターシャー」の「バークレイ」が正しい。三二七頁のジェンナーの開業地は「サドベリー」でなく、「バークレイ」である。同頁の父の名は「ステファン」でなく「ステイブン」である。三二六頁、八行目の「著書」は「著者」の誤りであろう。この